

木は地球を救う-26

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

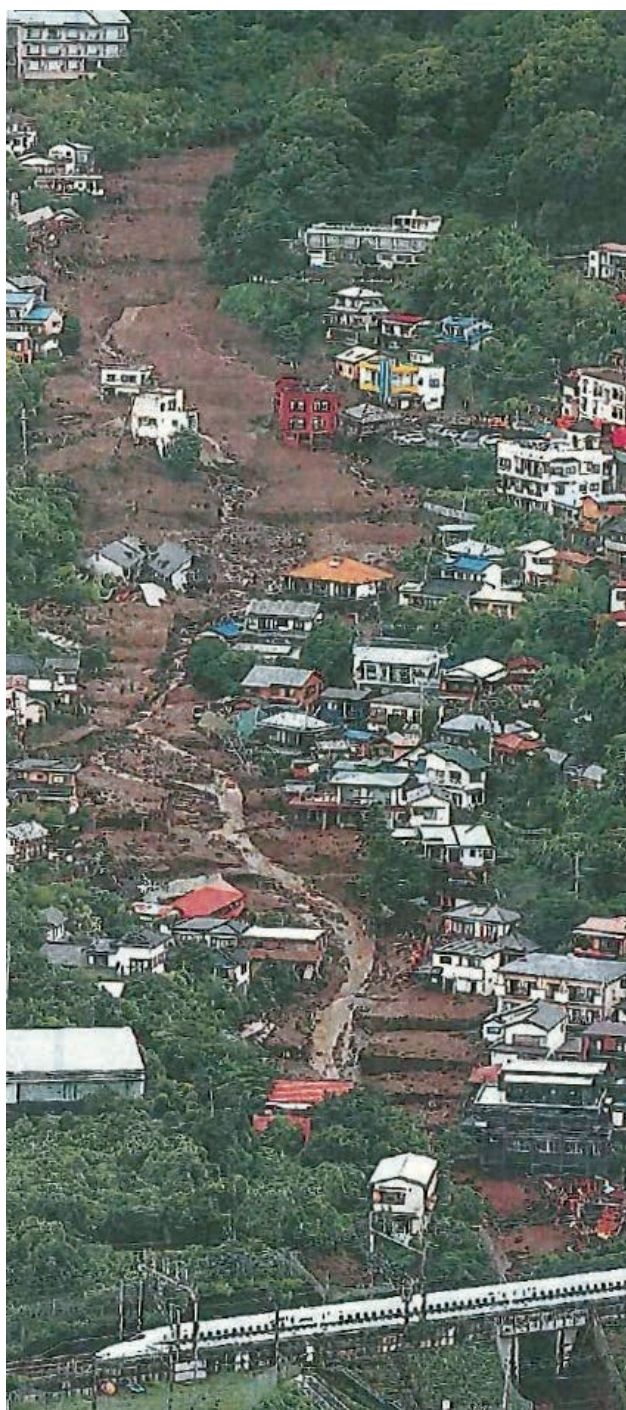
久々に「木は地球を救う」シリーズを書くことになった。「木材や」にとって三つの追い風が吹きだした。一つ目は、昨年9月菅内閣が発足し、総理の肝いりで2050年カーボンニュートラル実現へ向けての花火があがり、更に6月G7サミットで菅総理は初舞台ながらカーボンニュートラルを宣言しG7の同意を取り付け共同声明に盛り込むことに成功した。新型コロナウイルス対策、東京オリパラ開催の是非などで、苦戦中の菅総理にとって、カーボンニュートラル宣言は快挙と評価できる。

二つ目は持続可能な社会(SDGs)の実現の基本としての森林認証法が6月に改正されたことである。三つ目はNHKの朝ドラ(連続テレビ小説)「おかえりモネ」が始まり、連日のように木が如何に地球の営みに関与し、木は無くてはならぬ存在とされている。

この三つの追い風とウッドショックが重なり更に木材の重要性が高まっている。以下三つの追い風についてレポートします。

◇巨大な土石流発生

ところがこの原稿を書いている7月3日(土曜日)午前10時30分頃に突然静岡県熱海市伊豆山地区に、大規模な土石流が発生した。テレビで土石流が一瞬にして住宅を破壊し押し流していく有様を繰り返し放映した。ぞっとするような場面だ。自然の力の強大さ、人間の力は自然に勝てない、自然の力の恐ろしさ、そして人間の欲望にバチが当たったのではないかと感じた。この時点で2人の方がなくなり安否不明の方が20人いらっしゃると思われ、一刻も早い救出が求められるところである。



土石流が発生した伊豆山地区 朝日新聞 参照

◇土石流、盛り土が崩落

その後4日、5日の報道によると、県の調査発表として報じられたのは土石流の最上流付近に「開発行為」による盛り土がありこれを含む土砂の崩落が「被害を甚大化したものと推定される」との見解を発表した。この盛り土の量は約5万4千 m^3 と推定される。この盛り土と付近の土を含めた約10万 m^3 が崩落した可能性があるとしている。土石流は伊豆山を流れる逢初川^{あいぞめ}で3日午前に発生したが土砂の幅は最大120m、面積は12万 m^2 におよび約2キロmにわたって川道に沿って相模湾に流れ込んだ。逢初川の流域には、川に沿って道路がありその両脇に民家など他の建物が立ち並んでいるが、土砂に流されたというよりもなぎ倒され土砂に埋まっている。建物の被害は少なくとも130棟(127世帯、215人)に上るといふ。(朝日新聞参照)

◇土石流、盛り土が原因か、樹木2012年に消えた

県は上流にあった盛り土が崩落した経緯を明らかにした。盛り土現場はもともと谷であり木が茂る青々とした谷であった。国土地理院が公表している地図データによると崩落した土石流の最上流では2005年には木が生い茂っていたが、2012年の写真では地表が露出して階段状に造成されたようになっている。

◇谷を埋めると地下水が残り崩れやすくなる

2010年以前から人工の盛り土が行われ階段状の造成地として出来上がっていた。専門家(帝京平成大学佐藤剛教授)は航空写真などを検証した結果「もともとあった谷が造成地のような場所で途切れており、埋め立てられた可能性がある」一般的に、土砂などで谷を埋めた場所に地下水流が残り、降った雨が集まりやすくなる。佐藤教授は「埋め立てた地盤は元の地盤に比べて弱く崩れやすい。長雨によって大量の雨がしみ込むと、重さに耐えられず崩壊する恐れがある」と指摘している。この付近の土壌は水を含みやすく崩れやすい火山噴出物が多い。上流部で崩落した土砂が、周囲の土砂を巻き込みながら大きな土石流となり市街に流れ込んだとみられる。付近に住む人は以前は谷のようになっていた。覗き込むと怖かった。その後埋め立てて段々状に整備されたが、崩れないかと心配で覗かないようにしていた。と話していた。(日本経済新聞参照)

さてここで「木は地球を救う」の登場である。

ここ数年、毎年のように発生する洪水の被害が各地で報じられている。梅雨末期の低気圧、不連続線、急激な気温の変化など複合原因による災害だ。しからば何故このような災害が発生するのか？

しかも雨風ともかつてなかったような規模が、防災スケールの範囲を超え大きな被害をもたらす。

大雨による災害は梅雨末期に発生することが多い。梅雨のイメージがすっかり変わってしまった。ひと昔前までは梅雨と言えば「シトシトと降る雨」のイメージが、いまは猛烈な集中豪雨、気象庁の発表は、記録を取り始めてからの雨量は一日に1ヶ月分に相当する雨量などと発表している。年寄りにとっては「梅雨の印象が変わった」と言うべきでまた事実そうになっている。



土石流崩壊現場 日本経済新聞参照

◇なぜか、なぜ大雨が降るのか

一つは地球温暖化問題である。人間の近代化、合理化により、木を伐り、谷を埋め、石油を燃やし、自動車を走らせ、二酸化炭素をまき散らした。このままいけば、排気ガスにより気温が上昇、地球は温度が上がり海面上昇低地沈没、台風、強風、強雨、長雨など、まだまだあるがこれらがすべて人間の文明というが、人間の欲である。究極な便利さへの追求が地球は我慢できず、抵抗を始めたとみるべきだ。森林の伐採は二酸化炭素の吸収源を失い、ますます温度が上がり、大雨、大風、砂漠化が進む。強風により中国で黄砂が発生日本に飛来して今年のサクラノボ農家の収入を奪った。などなど枚挙にいとまがないほど被害が進んでいる。

◇地球を救うには温暖化を食い止めなければならない

本題に戻って木は地球を救う。今回の伊豆山の土石流被害では、土石流が発生したのは「緑したたる森林を切り倒し谷を埋めた」やってはいけないことをやってしまったので、起こるべくして起きた災害だ。数年前筆者は熱海の初島へ避暑に行きその帰り初島熱海間のフェリーボートから対岸の熱海を見る

と、山のとっぺんまで開発が進み家が点々と存在している。中腹の斜面は山肌が見えないほど建物がびっしり立ち並んでいる。旧来の戸建てから巨大なマンションに建て替わり熱海湾を睥睨している。地べたはアスファルトとコンクリートで覆われている。しかも急斜面だ。人間の欲もここまできたか。しかも、もし伊豆山のような土石流が熱海を襲ったら一体どうなるのか!! 一瞬頭をよぎりぞっとしたのを思い出した。

熱海で宿泊した旅館もほとんどが急斜面に建てられ、地べたはコンクリート、アスファルトで覆われている。水は一体どこへ逃げるのだろうか。

もっと言えば、熱海網代間の海岸線道路赤尾ホテルの端を曲がり、トンネルをくぐったあたりの真下の海岸線には、常夏の国ハワイへ来たかのような波打ち際に瀟洒な別荘が並んでいた。(かつては)小さな岬で遮られ目の前は文字通りの「プライベートビーチ」である。背後の崖は急峻で、道路からは降りてこられない。船で来るしかない別荘だ。老後はこんなところに住んでみたい。と夢を見ていたほどの良いところ。ご存じの方も多いかと存じます。ところが、ところがである。数年前の台風で熱海の海岸線のホテルは高波で大きな被害を受けた。

熱海湾に面した道路沿いにある建物はほとんどが、大波の洗礼を受けてしまった。このニュースを知った時、この「プライベートビーチ」はどうなったであろう。おそらくこの高波により大きな被害を受けたはずだ。その後訪問していないのでどうなったか確認していない。

言いたいことは、地球温暖化による気候変動が今までの常識を覆した。このままでは、大変なことになる。日本だけではなく世界中が同じ現象の被害を受けている。

そこで、木の出番だ。木を植えて二酸化炭素を吸収し、地球温暖化を食い止め、地球を救わねばなりません。

冒頭のカーボンニュートラル宣言、森林認証システム、と朝ドラが今追い風になっている。いまこそ業界を挙げて、「木は地球を救う」運動を大々的に進めようではありませんか。 続く